

この記憶があればいい

[聖書] コヘレトの言葉 8章 1～14節

「人の知恵は顔に光を添え、固い顔も和らげる。」賢者のように、この言葉の解釈ができるのは誰か。

それは、わたしだ。すなわち、王の言葉を守れ、神に対する誓いと同様に。

気短に王の前を立ち去ろうとするな。不快なことに固執するな。王は望むままにふるまうのだから。

王の言った言葉が支配する。だれも彼に指図することはできない。命令に従っていれば、不快な目に遭うことはない。賢者はふさわしい時ということを知っている。

何事にもふさわしい時があるものだ。人間には災難のふりかかることが多いが、何事が起こるかを知ることはできない。どのように起こるかも、誰が教えてくれようか。

人は霊を支配できない。霊を押しとどめることはできない。死の日を支配することもできない。戦争を免れる者もない。悪は悪を行う者を逃れさせはしない。

わたしはこのようなことを見極め、太陽の下に起こるすべてのことを、熱心に考えた。今は、人間が人間を支配して苦しみをもたらすような時だ。

だから、わたしは悪人が葬儀をしてもらうのも、聖なる場所に入出入りするの、また、正しいことをした人が町で忘れ去られているのも見る。これまた、空しい。

悪事に対する条令が速やかに実施されないので人は大胆に悪事をはたらく。

罪を犯し百度も悪事をはたらいている者が、なお、長生きしている。

にもかかわらず、わたしには分かっている。

神を畏れる人は、畏れるからこそ幸福になり 悪人は神を畏れないから、長生きできず 影のようなもので、決して幸福にはなれない。

この地上には空しいことが起こる。善人でありながら 悪人の業の報いを受ける者があり 悪人でありながら 善人の業の報いを受ける者がある。これまた空しいと、わたしは言う。

[1] 「何もかも忘れてしまおう」

先々週、星野富弘さんの詩を取り上げましたが、その星野さんが影響を受け、また愛している詩人が八木重吉です。その八木重吉さんの詩にこのようなものがあります。

—キリストを信じて救われるのだとおもい

ほかのことは 何もかも忘れてしまおう

「ほかのことは何もかも忘れてしまおう」と言うのですね。「ほかのこと」って何だったのでしょうか？ この時、彼は神様を信じながらも迷路のようなものに嵌り込んでしまっていたのか、或いは、自分を神様から引き離す色々な事柄に悩まされていたのでしょうか。もっと単純に、もっとシンプルに神様を信じたいという彼の心を感じますし、また、喜びも感じます。「これさえあればいいのだ」という解き放たれた喜びですよ。

[2] 深い悲しみや苦しみをどうするか

今日の「コヘレトの言葉」を聞いても皆さん感じると思うのですが、もう勘弁してほしいと思うような現実が幾つも書かれていますね（この8章だけではありませんが）。コヘレトは、当時の集会の力あるリーダーです。その彼が随分と、今自分が置かれている世界を嘆いています。…これは残念ながらいつの時代も変わらないのではないのでしょうか。ある文学者(?)が、人は生きている内に一度の戦争と一度の平和を体験するものだ、と言ったという文章をどこかで読んだことがあります。一度だって嫌ですよ。よく「運命」に翻弄されるなどと言いますが、でも、「運命」と言うよりも「悪しき力」だと思います。戦争というのは人災なのです。コヘレトの言葉が語る通り「人間が人間を支配して苦しみをもたらすような」ことです。悪が組織化されると、「愛」、「善」、「慈悲」というものは邪魔にさえなります。

戦争だけではなく、14節では善人がむしろ虐げられるという出来事が記されます。「善人でありながら 悪人の業の報いを受ける者があり 悪人でありながら 善人の業の報いを受ける者がある」と語っています。理不尽な苦しみです。神様を信じていても起こります。大岡越前とか水戸黄門のような胸のすくような解決があればよいのに、むしろ逆で、現実はまだ空しさだけしか残らないということばかりだと思えてしまいますよね。コヘレトも言います。「空しい」と。

そうすると人間はどうするのでしょうか。考えてしまうことをやめてしまいたくなると思います。力ある者に立ち向かっていっても仕方がない。却って空しいだけだと、現状の中で喜びを見出そうとします。15節などはそのように私には聞こえてきます。「それゆえ、わたしは快樂をたたえる。太陽の下、人間にとって飲み食いし、楽しむ以上の幸福はない。それは、太陽の下、神が彼に与える人生の日々の労苦に添えられたものなのだ。」まあ、人は苦しみ悲しみが深く大きいと、それこそ「何もかも忘れてしまおう」と、目の前の楽しみ、喜びに慰めを得るのもあることだと思います。それを責めることは出来ません。

けれども、信仰者はもう一つの道を知っていると思うのです。空しさを、また深い悲しみや苦しみを、神様にぶつけるんです。例えば詩編 55 編 23 節にこうあります。「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えて下さる。」これは、単なる心の持ち様ではなく、神様からの呼びかけです。「ゆだねよ」というのは、「ぶつけない。投げつけない」という意味があるそうです。—あなたは、自分の悩み苦しみを、または過去の出来事を忘れたいと思っても、自分ではなす術はなく、それは影法師のようにくっついてくるでしょう。それを、その重荷を、投げつけない、神様に、と言うのです。

[3] 「キリストを信じて救われるのだとおもい」

「福音」とは何なのでしょう。それは、神様ご自身から差し出された救いです。あなたは今なお辛く、心に苦しみがあるかも知れないけれど、あなたの苦しみ、悲しみの持って行き場所があるということです。また、過去のことを思うと心が疼くかもしれないけれど、そのあなたのことを知って、愛して、受け容れて下さる方がいるということです。その場所こそ、イエス・キリストであり、そのお方こそ、主イエス・キリストです。これは、コヘレトの言葉が書かれてから約 400 年程経ってから、神様が、時至って、このお方を「主」として地上に送られたのです。

今日初めに八木重吉の詩を紹介しました。

—キリストを信じて救われるのだとおもい ほかのことは 何もかも忘れてしまおう

これは、一見無責任なことのように思えるかもしれませんが、彼は重荷を降ろしたのだと思います。重荷は降ろして良いのですね。「キリストを信じて救われるのだ」と思えたら、自分を不自由にするさまざまなことに囚われなくなることが出来るのです。そのためにこそ主イエス様は来て下さった。今日、私たちは、そのキリストの招きに与ることが許されています。「主の晩餐式」こそ、私たち一人ひとりに対する、イエス様の愛の招きそのものだからです。

あの時主イエスは「これは、あなた方のために与えるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」（ルカ 22:19）と言われました。使徒パウロもコリントの信徒への手紙一の中で、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。」と書いています。(11:25)。ここで使われている「記念」という言葉はとても特徴的な言葉で、「アナムネーシス」と言いますが、「記念」と言うよりも「記憶」とした方が相応しい言葉です。記念碑のような過去の歴史ではなく、「記憶」「想起」です。思い起こすことです。自分の中にある一番大事な記憶というものはたとえ私たちが物忘れが激しくなっても、存在の中心に大切に失われない事と同じです。

「これはあなたのためのわたしの体、あなたのために流されたわたしの血」。主の晩餐は、世の終わりまで続くのです。私たちは忘れない記憶があります。忘れない罪もあります。過ちもあります。しかし、それにはるかに優る、決して失われない記憶があるのです。それは、主が私たちをがっしりと抱きとめて下さった（そして現在も！）という愛の記憶です。それを信じたい、心に刻みたいと思います。その時、私たちは、旧約のコヘレト以上に、前を向いて歩いていくことが出来ると思います。最後に、一つの信仰の言葉をお読みしてお祈りしたいと思います。

—現代語版『荒野の泉』「潤った園のように」（カウマン夫人編）から
「これは私のしわざである。」（列王記上 12:24）

あなたの心配ごとは、神である私の心配ごとでもあることに気が付いたことはありますか？あなたに触れる者は、誰であっても、私の目の玉に触れているのである。

あなたがたはわが目に尊く重んぜられる者。悲しみの中にあるのですか？それは私のしわざである。私は悲しみの人で、病を知っている。地上で得られる慰めなどでは、あなたの心が癒やされないようにしたのです。そうすればあなたは私の方を向き、永遠の励ましと確かな希望を受け取ることが出来るのですから。

これは私がしたこと、と救い主が言われた。腰をかがめて、私の額に口づけされた。あなたを愛するが故にこのように導いたのだ。ただ私のうちにとどまり、今は耐え忍んでいなさい。御父は、あなたにはこれが必要であると知っておられる。恐らくあなたには何故だかわからないだろう。失ったと思っているもののために悲しんではいけない。私の贈り物はあなたに最善である。

—私は涙を浮かべながらこう祈った。愛する主よ、お赦し下さい。私は知らなかったのです。地上で私が歩むべきすべての道は、あなたも共に歩んでくださるのですから、辛くはないでしょう。このことは私のためとなるに違いない。どの試練の中にも神の恵みは溢れている。だから神が私のために用意して下さった道は、どのようなものであろうとも、いつも最善の道であると歌おう。

お祈り致します。

主なる神様、この新しい月、ご一緒にあなたの御前に出ることが出来まして、感謝いたします。「あなたの重荷を主にゆだねよ」。そのために主イエスは来て下さいました。あの夜、ベツレヘムの飼い葉桶の中に来て下さいました。そして、人間の罪と弱さを知り尽くされてそれを愛し、十字架でご自分の命を捧げて下さいました。そして、甦って、今私たちと共に歩んで下さいます。どうか、この地上の歩みが灰色に思えても、あなたの愛のぬくもりの御手を信じて歩ませて下さい。あなたが愛して下さること、その記憶にいつも戻らせて下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。